慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	池田成彬とアメリカ : ハーバード大学留学期を中心に
Sub Title	Seihin Ikeda and America : focusing on the period of study at Harvard University
Author	小川原, 正道(Ogawara, Masamichi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2023
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.96, No.9 (2023. 9) ,p.1- 30
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20230928-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

池田成彬とアメリカ

――ハーバード大学留学期を中心に――

小川原正道

一、はじめに
二、池田の回顧録に見るハーバード大学留学
三、父の日記に見る留学生活
四、ハーバード大学所蔵史料から
五、結びに代えて

一、はじめに

三井財閥を率い、日本銀行総裁を経て、第一次近衛内閣で大蔵大臣兼商工大臣を務めた池田成彬は、一八六七年（慶應三年）に米沢藩士・池田成章の長男として生まれ、一八八六年（明治十九年）に慶應義塾別科に入学、一八九〇年、第一期生として慶應義塾大学部理財科に進んだ。未だ義塾には派遣留学制度[1]ができていなかったが、在学中に事実上の最初の派遣留学生として、ハーバード大学に留学する[2]。

『慶應義塾百年史』によると、大学部設置に際してハーバード大学から教員を招聘するにあたり、仲介役を担ったアメリカ人宣教師アーサー・M・ナップとハーバードの間に留学生を派遣する口約があり、池田はそれに選ばれたようである。(3) 池田自身、奨学金付きの留学生を義塾からハーバードに派遣することになり、当初は文学科から川合貞一、理財科から池田、法律科から牛場徹郎が留学する予定だったが、川合と牛場が行けなくなり、結局自分一人になったと回顧している。(4)

なお、当時慶應義塾教頭だった門野幾之進は、義塾初の外国人教師であるクリストファー・カロザスが着任して以来、義塾では留学生を送りださなければならないという話があり、ハーバード大学と交渉して池田を留学させるに至ったとして、「海外留学生派遣の一番最初」として池田の事例を位置付けている。(5) しかし、ハーバード側が奨学金を給付するのは経済的に困窮している優秀な学生のみであり、池田は前者に該当しないため奨学金が支払われないこととなり、池田が塾長の小幡篤次郎に事情を伝えてきたため、義塾評議員会は一八九一年七月、ハーバード側から奨学金を得られない場合に限って、一年間三百ドルを四年間補助することを決めた。同年十二月の評議員会では、ほかに出資者がいる場合はこれに委託し、いない場合は右の決定を適用するよう修正され、最終的に合計約二千数百円を池田に貸与している。(6)

留学資金の概略はこの通りであるが、池田自身は果たして、ハーバード大学で何を学ぼうとし、実際にどんな授業を履修して、いかなる成績をおさめ、どのような文化を学び取って帰国し、それは池田のキャリアにおいてどんな意味をもち、親英米派の財政家・財界人として知られることになる池田のアメリカ観の形成にどんな影響を与えたのだろうか。池田に関してはこれまで、銀行家、経営者、財界人、財政家としての側面に主な焦点があてられてきたが、(7) 管見の限り、留学について正面から扱った研究はない。そこで本稿では、池田の回顧録を踏まえた上で、東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター原資料部が所蔵する、父の日記や池

田の書簡、今回新たに見出した、ハーバード大学アーカイブス所蔵の池田の入学願書、推薦状、履修科目・成績表などを用いて、その留学の実相と、アメリカ観形成における意義をあきらかにしようとするものである。

池田自身、一九四八年（昭和二十三年）に受けたインタビューで、「私はおやぢとアメリカと頼山陽から一番大きい影響をうけたと思つています」として、アメリカから受けた影響について「全体ですね。幸いにして私はよい人とばかりつき合つてよい家庭に知り合いがあつたからかも知れませんがそんなことでよい気持にならざるを得なかつたのですね」と述べている。[8] これらを踏まえて、池田研究の第一人者である松浦正孝は、「成彬は二三歳のとき、ハーバード大学に留学したが、このときの経験は、彼の出自や家庭環境とともに、彼の人格形成に大きな影響を与えた。……ここで形成された生活様式は、終生守られた」と評している。[9]

その意味で、池田の留学について解明することは、親英米派の財政家・財界人としての池田の原点を探る営みになるに違いない。

二、池田の回顧録に見るハーバード大学留学

池田の回顧録によると、一八八六年十二月に慶應義塾の別科に入り、一八八八年七月に卒業したが、その七月から一八九〇年一月まで、東京や横浜でイギリス人に就いて英語を学び、一八九〇年に創設された義塾大学部理財科に入学している。[10] 帝国大学志望だったが、総長である渡辺洪基に相談すると、義塾で英書を読む力を身につけてから帝大の選科に入れと薦められ、義塾別科を選んだという。別科卒業後、義塾にも間もなく大学部ができ、アメリカから教師を招聘することとなったため、結局帝大には行かなかった。当時は新聞記者を目指し、特に政治に志があったという。理財科ではハーバード大学出身の主任教師であるギャレット・ドロッパーズから経済学

を学び、英語には不自由しなかったとしている。ドロッパーズからは、「イケダ。イケダ」と呼ばれて可愛がられた。[11]

在学中にハーバード大学と慶應義塾との間を連携すべく、奨学金を付けて留学生を派遣することとなり、ナップが間に入って留学が決まった。三名の候補者のうち池田のみが留学することとなったのは、冒頭に述べた通りである。池田は、「その当時アメリカで学問するということゝ、ドイツ、ヨーロッパへ行くこととどういう風にお考えでしたか」と南博に聞かれた際、「アメリカの方が手軽のように思つておりました。旅費もやすいせいもありましようがアメリカの方が実際に手軽に行けたものです」と答え、本来はイギリスに留学したかったものの、「なかなか学資金がかゝる」と観念していたところ、奨学金の話が出たため、「よい機会だと思つて行つた」と語っている。[12] 池田は、当初はハーバード側が「四〇〇弗位」の奨学金を給付してくれるため、日本から四五〇円持参すればよいといわれていたが、実際にハーバードに着くと「規約」にそうした決まりはなく、「貧乏」で「優秀」な学生にのみ奨学金を給付するといわれ、チャールズ・W・エリオット総長に面会して「貧乏」でなくとも給付してほしいと訴えたものの、「それは規則で出来ない」と断られた。「宣教師のナップの通訳が悪かつたのでしよう」と池田は述べている。ハーバード側からはその後、資金提供の申し出があったが、「貧乏」を理由に受けとるわけにはいかないと池田は辞退し、塾長の小幡に書簡を出して義塾としての対応を求め、結果として、父を保証人として義塾が貸与する形になったという。[13]

入学にあたっては、試験にギリシャ語とラテン語があったが、「エリオット総長は私に対し、グリーク、ラテンを免除してそれに代うるにチャイニーズ・アンド・ジャパニーズをやらせるという。何のことだか分からないが、それに対して日本の学校の証明を持つて来い。その外にジャーマンとフレンチを二年間やれ、――とこう言われて、正直にやったが、フレンチは少し読めるが、ジャーマンはすつかり忘れました」と池田は回顧している。

この入試科目の変更は、ギリシャ語とラテン語を重視する西洋では大きな反響を呼び、「新聞はエリオット総長の英断をほめて書き立てたものでした。序でにセイヒン・イケダという日本の学生の名が方々の新聞に出た」という。池田は最初の一年間は「正科」には入らず、「スペシャル・スチューデント」となり、結果として五年間留学することとなった。[14]

なお、エリオットの人柄について池田は、本職は科学者であり、哲学者や神学者が大学総長を務めることが多いなか、総長に就いたのは「余程偉かつた」と評し、「寄附集めがまた上手であつた」として、それはエリオットの「人望」や「信用」によると述べている。入試科目の変更についても、「エリオット先生だから出来もしたし、輿論もこれを認めたのですね」として、「とに角、非常に人望のある人ですから、学校のことばかりでなく、何んでもエリオット先生が言へばピシャッと納まった。ですから、本当の意味でプレジデントですね」と記した。[15]

ハーバード大学で最初に受けた印象も、エリオットの人格評価と関わるものであった。「私がアメリカの学校へ行って一番最初に気になったのは、学校の食堂の壁に彫られた沢山の人の名前であった。最初どうしてもその意味が分からない。その食堂はメモリアル・ホールといふ建物の中にあつて、随分大きなものである。……その中、段々気をつけて見てゐると、どうやら戦死者の名前らしいといふことが分つた」。そこから池田は、「公共の為に力を竭す」アメリカ文化について語り、それは「アメリカ人の寄附行為の中によく現れてゐる。アメリカの大学へ行つてみると、寄附によつて出来た建物が非常に多い。……これはどこの大学でも見られる。学校とか病院とかの公共事業にはアメリカ人は進んで金を出す」として、ハーバードやイエール、コロンビア、プリンストン、シカゴなどの大学が集める寄附金は巨額であり、ハーバードにあってはエリオットの「人望によつて金が集まる訳である」と振り返っている。[16]

池田は慶應義塾時代まで、同人誌に「尊王攘夷論」を発表するほど「尊王攘夷思想」に傾倒しており、[17]「頼山

陽のものはアメリカへ行く時も持つて行つた」が、「アメリカへ上陸した途端に攘夷論だけは一遍にケシ飛んでしまつた」という。鹿鳴館外交で伊藤博文や井上馨が実践しようとしているものを実見し、「日本もどうしてもこゝまで追付かなければならないといふこと」に気づいたためであった。[18] 池田のアメリカ観が好意的になった背景には、こうした衝撃があった。

その目から見たボストンやケンブリッジの文化や風景は好ましいものだったようで、「ボストンは文化の中心だといふ自負があるから、たゞ家柄が古いだけでは駄目で、立派な学者、政治家――当時の知識階級より支持される人が出て居なければ尊敬されない。竟りボストンでは、学問があり、知識があり、人格が立派であるといふことが社会的に尊敬を受ける条件になる……それがなくては幅がきかない。これは一寸、普通の人が考えて居るアメリカとは違ふところではあるまいかと思ふ」として、ボストンやケンブリッジの家庭では芸術や文学などが話題となり、「日本の家庭の様に詰らない品のよくない話は、ボストン、ケンブリッヂではどこの家庭でも聞いたことがなかつた」と後年、語っている。[19]

アメリカの家庭では、女性の教養が高いことが特に印象深かったようで「イギリスやアメリカの婦人の教養がどうしてそんなに高いか」について、「第一にはアメリカの家庭ではいろ〳〵の雑誌をとつて居る、しかもその雑誌がみんな立派なもので、私どもが居つた時分でもパーミスクルとかその他いろ〳〵良い雑誌があつた。そして、夜になると婦人は何をしてゐるかといふと、われわれが話してゐるところへ来て居て、編物をしたり、雑誌を読んだりして居る。……ボストン、ケンブリッヂの環境といふものはさういふ風であつた。だから自然に人は知識人でなくては駄目だ、たゞ金持だけでは人に相手にされない、知識があつて立派な人格者になるといふことは、男でも女でも一様に心がけて居て、その意味ではほんとうの男女平等になつて居る。まづ何よりも尊敬を受けるだけの教養を身につける、さうすると自然に尊敬しろと言はなくても尊敬する様になると思ふ」と述べてい

る。[20]

宗教に対して寛容である点も印象に残っており、「ハーバードはその点実に自由であつた。また、ボストン、ケンブリッヂといふところはさういふ気風であつた。だから、礼拝堂は行きたいものだけ行く。……特に私の様に宗教に関心のない者は三年居らうが五年居らうが、どこからも拘束を受けない。誰もそんなことは問題にしない。問題になるのは、学問、知識、人格さういふことだけである」と回顧している。[21]

アメリカに対する認識、特に大学への評価も好意的で、「私はアメリカの大学を出て居るので、アメリカの教育といふものはよく知つて居るし、尊敬もして居る。特に大学教育はいゝと思ふ」と記している。[22]

回顧録から見る限り、池田はアメリカ留学生活を通して、攘夷意識からの脱却にはじまり、アメリカの公共的精神や寄附文化、それを象徴するエリオットの人格と信用、知識や教養が重んじられ、それが普及しているアメリカの家庭、そして宗教に寛容な雰囲気、といったものを肌で感じ取っていったことを確認することができよう。では、留学当時には何を感じ、何を考えていたのか、次章でその点を検討していきたい。

三、父の日記に見る留学生活

池田のハーバード大学在学中、父・成章は「送米日記」と題する日記をつけており、池田の留学に関する事項を書きとめている。以下、この日記を用いて、池田の留学生活の一面と、息子を送り出した成章の心境を読み解いていこう。[23]

「送米日記」の一八九〇年八月二十七日条で成章は、池田が出帆してから二十一日が経過し、「恰も当該地へ到着に而……行路之難嘆息之外なし」と、アメリカに着いた池田を心配している。[24] 九月一日付の池田宛書簡案が同

日条に記されており、成章は「其地風土病疾」に「用心」するよう伝えた。[25] 九月十六日に池田から書簡が届いたが、「安着之吉報」であり、「初而之航海」のため最初は苦労したものの、「四五日目よりハ海上之平穏又航海に馴」れたため苦痛を感じなかったとして、「何より幸福」と成章は記している。ただ池田は、「船中上中下船客取扱之様」には「閉口」したようである。この時点では留学費用をめぐるトラブルは表面化しておらず、「慶應義塾諸先生」は「御親切」であるして、池田に「送金ニ付金額時期又送金之手続等詳細申越ありたし」と伝えている。[26] 九月二十六日条では、池田が「ボストンホテル」での「御給仕付之御話」を伝えてきたらしく、成章は「抱腹絶倒」しているが、義塾にはやはり好意的で、池田が世話になった人のことは忘れていないとして、「ドロツハース氏之懇切周到なるハ感心之外なし外国人中殊に米国人ハ親切他ニ冠絶」していると賞讃した。[27] ドロッパーズの恩に報いるべく、成章は十二月二十八日に「ドロッパース氏へ歳暮として荷物」を送っており、[28] 翌月十日にはドロッパーズから「緋絹」などが届いた。[29]

成章の日記には頻繁に池田宛の書簡案が記され、日本国内の情勢などが記されているが、池田はこの頃、あまり頻繁には成章に近況を報告しなかったらしい。一八九一年の「本年第一回之郵書」が届いたのは二月六日で、「ワシントンニーヨーク辺」の様子を伝えてきたが、成章は「寧ロ田舎之為め其辺如何」との所感を記している。[30] そして三月三十日付の池田宛書簡案で成章は池田に対し、「毎便郵書之目方之少なき故子供等之毎日之細事を記載し置」くよう「厳命」した。[31] これを受けて池田は詳細な近況を伝える書簡を送るようになり、四月十一日に届いた同年「第七回郵書」では、「学校食堂に加入」して「好都合」であること、「三時之献立」が充実しているため「是より身体も益丈夫なる可し」などと記している。成章は、ドロッパーズの「舅家」が池田の保証人となっていて「感謝に堪へざるなり」として、池田を「庇護」しているドロッパーズを「終身忘る可からざる之恩人」と評している。[32]

池田の留学費用をめぐるトラブルが表面化してきたのはこの頃のようで、五月十四日条には、「ドロッパース氏ハ恩人なり」として、「人之深切を虚しく」するようなら「余勉めて引く可し」としつつ、「余独り引くも唖之集」であると記している。「小幡ハ掛合之事」が懸案とされているから、小幡やドロッパーズなど、慶應義塾側から学費を貸与すると提案され、これを受けるかどうか、苦悩していたのであろう。[33] 五月十六日には、赤坂見附にあるドロッパーズの自宅で、成章と小幡、益田英次、「外ニ慶應義塾雇米国教師」が集まり、学費貸与問題について話し合われたようだが、ドロッパーズは「ハーバート大学ノ写真」を見せて、事務所や図書館、食堂など[34]を紹介し、池田が今ここで学んでいるとして、四年後には「大丈夫卒業」すると語り、成章を喜ばせている。恩人としてのドロッパーズは、留学費用問題をめぐる緩衝材のような存在であった。六月八日、横浜正金銀行で小泉信吉と面会した成章は、知人からハーバード大学の「写真帖」を見せられて、「米国之大学……宏壮想像之外」だと記している。[35] ハーバードの学習環境に惹かれつつ、留学費用の貸与を受けるかどうかに逡巡する日々であった。

池田は一八九一年十月にハーバード・カレッジの一年生となるが、この頃、二年間はアメリカで、あと二年間はヨーロッパで学びたいという意向を、成章に示したようである。同年十月十四日付池田宛書簡案には、「ゼームス教授之厚意……感謝ニ堪ヘズ」「ゼームス教授之汝を教誨したるの深切なるハ余之謝する所なり」とウィリアム・ジェームズ[36]に対する感謝の念を記した上で、「余ハ学力もなく智識も乏しけれハ浅薄之譏りハ免る能ハさる」として、「汝を参考になさん」と勉学に励む池田を称えている。[37]「欧羅巴留学之事」についても、自分は洋学のことは分からないが、「欧羅巴と米国とを比較せハ必ずゼームス氏之言ふ如くなる可し」とジェームズの意見に賛同しており、「学士之称号を得て世に誇る者」がいるが、学士の称号と実際の学力のいずれが大事かも「是亦ゼームス氏之言の如くなる可し」と述べている。ジェームズはアメリカの学位よりヨーロッパの学力を優先す

べきだとアドバイスしたらしいが、成章は「ゼームス氏自らいふ所」をもって「汝に勧むる」のは「不可」だと述べ、大学は四年間に過ぎず、「初期之成績」を見ても「ハーバート大学生徒中之末劣」という現状で、「米国と欧羅巴之学体を比較し此所は二年彼所は二年等と企望」するのは分不相応だとして、仮にヨーロッパに二年間留学した場合、「本邦博士学士之称号ある者を凌駕」するだけの学力を身につけねばならず、「初期之目的を変換せずハーバート大学を卒業」するよう諭している。池田がヨーロッパ留学を志向した理由は不明だが、後述の通り、ニューイングランドを通してイギリスの感化を受けていたため、イギリスで学びたいと考えたのかもしれない。なお、成章は続けて、「ドロッハース氏ハ汝之恩人にして汝之洋行彼人に依て成ると云ふも不可なし能くドロッハース氏之意見をも仰ぐ可し」とドロッパーズにも相談するよう求め、「補助金借金之事は前に述るか如し」と学費問題に言及して、ナップとジェームズがこの件でも「厚意」を示しているため、「徒ら義を棄て利に奔る之趣旨」には従えないと記している。彼等に、義塾からの貸与を受けるよう勧められていたのであろう。(38)

ドロッパーズは一八九二年三月二日、成章に雛人形を送っており、(39)成章との親密な関係は続いていたが、留学費用問題は成章にとって重い精神的・経済的負担となっていく。八月六日付の池田宛書簡案では、「一昨年汝ニ洋行を許シた」際には四年間で四百五十円負担すればいいといわれていたのに対し、実際は「円ハ弗に変し四カ年ハ五年となり……意外之情況」に陥ったとして、毎年かかる費用を合計して「金千九百五十二円余」に達するため、「田畑株券」などを手放す事態となっており、卒業後に負債を返済するよう求めている。(40)この段階で、資産を売却して留学費用にあてていた上に、義塾からの借用を受け入れていたことがわかる。(41)十二月十日条では、池田から「ドロッパース氏へクリスマス贈物の事何の何品たる可し」と記した書簡が届き、成章はさっそくこれを手配し、(42)翌年一月二十五日にはドロッパーズから礼状が届くなど、ドロッパーズとの関係は良好を維持したものの、(43)三月六日付の池田宛書簡案では、「慶應義塾貸費」については、「他日紛議の基となる」と記し、「巨大の

債を負ふ」が、「卒業」して「何等の方法を以て返付」するよう改めて説き、池田が返済に苦労することを見越して「余ハ怨念」を抱くとまで述べている。[44]

成章は池田からアメリカの寄附文化について聞いたらしく、四月三日条には、ハーバード大学に一口十万ドルの寄附をした人々が、「死後に至りて始て其氏名」が公表されると知って、「慙愧」に堪えず、「殆と顔色なし」と書いた。[45] しかし、成章の無念が晴れたわけではなく、六月一日条には、学費の「救恤補助」が「貸費」に転じた経緯を記し、ハーバードが「救恤を甘んせさる心底」には池田が「前途亡き者」との判断があるのではないか、と怪しんでいる。[46] 同月十五日条には、ナップから「四百弗位携帯」すれば「名誉学費をハーバート大学より与へ」ると聞いていたのに、ハーバード側への「ドロッパースよりも掛合」もむなしく貸費に「変更」となり、「返済の義務ハ成彬之一者の負担」となったことに、「今更悔るに及ふなり」と記した。[47] 池田としては、父のこうした窮状や心境、自らの義務を知り、あるいは察して、何としても卒業し、負債を返済しなければならない立場となった。

これ以降、成章の日記からは、池田の留学に関する記述が減っていくが、莫大な経済的負担に対する一種の諦念のようなものが、成章を襲っていたようである。一八九四年二月二十日付池田宛書簡案では、「慶應義塾へ貸費相願致候事」を「今更可否」を論じても仕方ないとしつつ、成章が負債の「保証之事」を承諾して「生計苦」に陥っている現状に、「米国留学ハ余家之程度に適合せざるものなり」と嘆いている。[48] 帰国を控えた翌年六月二日付池田宛書簡案には、「欧州巡視」をせず「余ハ直航之帰国を望む切なり」と記して、池田の早期帰国を心待ちにし、[49] 七月二十八日条には、無事に横浜に到着したとの電報を受け取って、「安着を賀」している。[50]

池田にとっての帰国は、卒業という最低限のハードルはクリアしたものの、留学費用をめぐる父の重い精神的・経済的負担を慰め、自身も多額の返済義務に応じる出発点であった。

四、ハーバード大学所蔵史料から

ハーバード大学アーカイブスには、ドロッパーズによる池田の推薦状、池田の入学願書、ハーバードでの履修科目・成績表などが所蔵されている。以下、ハーバードの在籍者名簿や卒業生名簿、授業案内などをあわせて用いながら、大学側から見た池田のハーバード時代について考察していきたい。

慶應義塾大学部理財科主任教師であったドロッパーズは、一八九〇年七月二十五日にハーバード大学で秘書を務めていたフランク・ボールズに宛てて池田の推薦状を出し、「私の若い日本人の友人である池田氏を、あなたに紹介できて光栄です。池田氏は六ヶ月間、私の政治経済学のコースの学生であり、この間、私は彼の非常に高度な意見を学びました。彼は現在、奨学金の支給を受けてハーバード・カレッジ入学するつもりでいます」と書き出し、池田はハーバード・カレッジの正規学生になろうと希望しているものの、入学に向けた準備が十分でなく、「彼はラテン語とギリシャを学んだことがないため、合格する望みがありません。私は、日本語と中国語、文学を、これらに代えることをお薦めします。エリオット総長は、何らかの特別な配慮を施すかもしれない、と述べていたと信じています」と記しており、池田が当惑した入試科目の変更が、ドロパーズの提案とエリオットの何らかの示唆によるものであることがわかる。ドロッパーズとナップは池田に、奨学金の給付が約束されていると伝えてあるとして、池田は奨学金なしでは十分な成果を挙げられないと強調した。その上で、ドロッパーズは「ハーバード・カレッジが池田氏を採用することは、慶應義塾大学部の教員にとって大きな満足となります。彼はすべての教員から最大の敬意を受けており、ハーバード・カレッジで彼を知ることになる皆さんも、同様になると確信しています」と池田を推薦している。(51)

同月二十七日にドロッパーズはエリオットにも池田の推薦状を記し、池田がハーバード大学で学ぶために八月

七日に日本を発ったこと、池田がドロッパーズの自宅でも個人指導を受けてきたこと、池田がハーバード・カレッジに入学することを常に望んでいること、などを記した上で、池田の父親と学費や旅費の工面について相談したドロッパーズは、その負担が日本人にはとっては大きく、しかしハーバードの学生にとっては不十分であるとして、「ナップ氏があなたに伝えたように、池田が奨学金の恩恵を受けることが最も重要です」と述べている。さらに、「ナップ氏がこの点について十分明確にしていなかったことを、私は少し恐れています」と危惧し、「池田氏は奨学金が給付されるというナップ氏と私の約束のみを携えて渡米しました」として、「彼は文字通り、寡黙で、勤勉で、緻密な紳士です。彼は金銭問題について特に注意深く、借金について細心の注意を払っており、それはハーバードでも同様だと確信しています」と述べている。こうした曖昧な「約束」、そして池田の金銭感覚が、すでに見たようなトラブルを生む要因となったのだろう。ドロッパーズはここでも、池田がすべての入学試験に合格する準備はできていないとして、もしギリシャ語とラテン語を中国語と日本語に代えてくれるならば、池田が試験を通るのは疑いないと提案している。エリオットは八月二十六日、事務担当者にこの推薦状を転送して池田に対して必要な支援をするよう指示し、九月三日には、宛先不明だが、「A・ブリッシュ」という人物が、池田が、「私の友人で東京にいるドロッパーズ教授が彼を私の家族と認めるよう望む手紙」を携えてやってきたことを伝える書簡も残されている。また、こちらも宛先不明だが、同日に「A・H・ワード・ジュニア」が池田の人物照会に答えて、「池田氏が優れた習慣と良き道徳的特徴、真摯な目的を有する若者であると信じます」と述べた書簡もある。池田はまず、ブリッシュとワード・ジュニアの家庭の世話になったのであろう。(52)

池田がハーバード・カレッジの特別学生（Special Student）となるべく作成した入学願書は、一八九〇年九月一日に提出されており、氏名欄には「Seihin Ikeda」と自筆で記している。これまでの学習歴の記載欄には、米沢の男子校に通ったあと、一八八六年に翻訳などを学ぶために慶應義塾別科に入学して一八八八年にディプロマ

を取得したこと、一八九〇年に義塾大学部に入学して同年七月まで在籍して渡米したことなどが記され、ハーバード大学の卒業生として世話になった教授として、ドロッパーズとジョン・H・ウィグモアの名前を挙げている。なぜ正規課程でなく特別学生を志望するのかという欄には、「入学試験のための準備ができていない」ためと記載し、何を学びたいかという欄には「政治学」（Political Science）と書いている。今後連絡をとるべき二名の記載欄には、先述の「Miss. A. Blish」と「Mr. Andrew H. Ward Jr.」の氏名・住所が記されている。在籍期間は一年間、将来的に学位を取得する正規学生になることを目指しての入学志願であった[53]。義塾時代に政治に興味を抱いていたことが、政治学への関心を掻き立てたのだろう。

かくして池田は一八九〇―九一年度にハーバード・カレッジの特別学生となり、「646 Cambridge」に住んだ[54]。一八九〇年九月に実施された入学試験に合格し、一八九一―九二年度は無事、ハーバード・カレッジの正式な一年生となって「37 Trowbridge St.」に転居し[55]、一八九二―九三年度は二年生として「65 Hammond St.」に住み[56]、一八九三―九四年度は三年生となって「18 Story St.」に移っており[57]、一八九四―九五年度は四年生に進級して「52 Oxford St.」に暮らした[58]。そして一八九五年六月二十六日、「Bachelor of Arts」の学位を得て、ハーバード・カレッジを卒業している[59]。池田の住所は毎年変わっており、いずれもハーバード・ヤードから少し離れた所にあるため、おそらく学生寮には住まず、現地の家庭にホームステイしていたものと思われる（初年度の住所はブリッシュやワード・ジュニアのそれではないため、すぐに引っ越したのであろう）。こうした経験が、ボストンやケンブリッジの家庭に関する回顧を生んだものと思われる。

この間、一八九一年三月二十六日にハーバード大学が作成した覚え書きには、同年九月に池田を入学させるにあたって、以下のような条件が掲げられている。第一に、池田が代数学や平面幾何学などの初歩的な数学や物理学を教育されてきたことを、慶應義塾大学部から証明してもらう必要があること、第二に、池田はまず特別学生

としてのコースを申し分なく通過しなければならないこと、第三に、初歩的・発展的なドイツ語力、発展的なフランス語力を向上させる必要があること、第四に、池田の大学での学習にフランス語Aとドイツ語Aが含まれない場合、ドイツ語Aを含む四つの選択コースを履修しなければならないこと、第五に、池田は第一学年に、ドイツ語Aに加え、英語A、化学A、政治経済学1、歴史学2を履修する必要があること。池田の基礎学力（数学、物理学、ドイツ語、フランス語）が、問われていたことがわかる。[60]

池田の履修科目・成績表によると、特別学生だった一八九〇―九一年度の履修科目と成績は、英語A（E）、フランス語A（B－）、政治経済学1（B）、歴史学2（C）、化学A（D）、であった。成章が「ハーバート大学生徒中之末劣」と評したのは、この成績のことである。正式な学生となった一八九一―九二年度は、英語A（E）、政治経済学2（C）、政治経済学4（B－）、歴史学1（C）、歴史学12（C）、一八九二―九三年度は、英語B（C）、政治経済学5（B）、政治経済学6（B）、政治経済学7－1（C）、政治経済学7－2（B）、歴史学13（B）、政治学4（C＋）、政治学7（C）、一八九三―九四年度は、英語B（C＋）、ドイツ語A（D）、フランス語1B（C）、政治経済学12－1（B）、政治経済学12－2（B）、歴史学11（C）、現代美術6（C）、現代美術7（B）、最終年度となった一八九四―九五年度は政治経済学9（D）、歴史学9（C＋）、歴史学20C（B）、政治学10（B）、であった。[61]

語学には若干苦労した様子がうかがえるが、政治経済学を中心に、歴史学や政治学などを学び、それなりの成績をおさめていることが確認できる。池田は、フランス語は少し読めたがドイツ語は苦手だったと回顧していたが、たしかにドイツ語はDであり、フランス語はB－とCとなっている。

ハーバード大学が毎年刊行している授業案内で特別学生当時の履修科目を確認してみると、英語Aは英語の言葉遣いや構造を学ぶ講義で、聴講とディスカッションが求められた。フランス語Aはフランス語の散文を用いた

入門コースで、入学試験時にフランス語を選択しなかった学生向けに提供されており、歴史学2は立憲政治についての入門コース、化学Aも入門講義で、政治経済学1は経済学者のフランク・W・タウシッグ助教授からジョン・S・ミルの政治経済学原理を学ぶ授業であった。[62] 理由は不明ながら、当初学びたいと記していた政治学は、この年度には履修していない。

一八九一―九二年度以降も政治経済学を中心に学んでいるため、授業案内で確認できる範囲で、その概要を示しておこう。政治経済学2の詳細はわからないが、政治経済学4は七年戦争以降の欧米経済史を扱う講義で、[63] 政治経済学5は鉄道輸送に関するタウシッグの講義、政治経済学6はアメリカにおける関税法制の歴史で担当者はやはりタウシッグ、政治経済学7は課税法の理論で担当者は政治経済学講座の主任だったチャールズ・F・ダンバー教授、[64] 政治経済学12－1は、十八世紀半ば以降の欧州大陸史で担当者は歴史学者のサイラス・M・マックベーン教授、政治経済学12－2はジョージ二世治期以降のイングランド憲法史で、担当はマックベーン教授と歴史学者のエドワード・P・チャニング助教授であった。[65] 政治経済学9は、一六世紀までのイングランド憲法史についての授業である。[66]

池田は、ドロッパーズの推薦を受けてハーバード大学に入り、タウシッグをはじめ、ダンバー、マックベーン、チャニングといった教授陣から、英米の法律・憲法・経済を中心に教えを受け、その傍ら、歴史学や政治学、化学、現代美術について学びつつ、英語、ドイツ語、フランス語の語学力向上に努めた。ドロッパーズはまさに「恩人」であり、ミルは慶應義塾別科で教授されていたため、[67] その政治経済学原理から政治経済学を学びはじめたのは、義塾での学習の延長として捉えることができよう。のちの財界人、財政家としての学問的基盤は、主に政治経済学と語学によって構築されたのである。

五、結びに代えて

ハーバード大学を卒業した池田は、一八九五年七月、英語をはじめとする語学力、政治経済学を軸とした学識、エリオットからの人格的感化、恩師や同窓生との太い人脈、寄附文化をはじめとするアメリカ理解、そして、留学費用問題を通じて磨きがかかった金銭感覚や慶應義塾への負債返済義務などを携えて、帰国した。まずは就職し、返済への道筋をつけねばならない。

最初に就職したのは時事新報社で、論説の執筆を担当した。書いた原稿を福沢諭吉が「徹頭徹尾真赤」に修正し、三週間の間に四、五本が掲載されたものの、受け取った月給が「二十円」であったことに安すぎると激怒した池田は辞任する。金銭感覚が鋭すぎた上に、高額の報酬を得て負債を返すべき立場にあった。留学帰りというプライドもあっただろう。池田は、小幡から三井銀行への就職を斡旋されて、支配人の波多野承五郎と面会し、「五十円以下」では働かないと切り出して、採用された。留学時代の勉強が生きるかと思われたが、「アメリカでは大学にバンキングというコースがあつたが、それは中央銀行の組織はどうだとか、紙幣発行はどうだとかいうものばかり、つまり理論ばかり」で役に立ちそうになく、実際に仕事現場には「ハーバードでやつたバンキングなどといふ高尚な学問の匂ひなどはどこにもない[68]」状態であった[69]。

しかし、留学で培った人脈は、池田を支え続けていく。当時池田は日記風に日々の出来事を記し、ある程度まとまった段階で父に送っていた[70]。三井銀行大阪支店に勤務していた一八九七年六月十五日には、同行で英語教師として雇用した「英人フォレスト」と会食しており、「同人は英人なれども久しく米国にあり又ハーヴァード大学の傍辺に居住した」ため「款話を極めたり」という[71]。留学当時を懐かしんでいた、池田の姿がうかがえる。池田にとって重要な人脈は、慶應義塾とアメリカ留学を経て形成されたものであり、父宛書簡の一八九七年九月二

日条で池田は、「銀行内の交際を外にして慶應義塾出身者、米国留学者間等の交際あり其煩繁なるは日誌の証たる処に御座候」と述べている。[72] 同月二十八日条には、ドロッパーズが夏期休暇中に「亡妻の妹と結婚したる旨在ケムブリッジのランド氏より通知あり」と記した。[73] 留学時代からの交際はその後も池田を支え、翌月二十二日には、「ハーヴァード大学同窓中村桂次郎」が来訪したほか、先述の「フォレスト」の饗応を受けている。[74] 十二月十日には、「米国の旧知」である「ケ子デー」が来日するとの電報を受け取って「突然なるに驚」[75]き、翌日にその宿を訪れると、来日したのはケネディの弟で、「此年六月ハーヴァード大学を卒業し夏家を辞して」、世界漫遊旅行に出たことがわかった。[76] 池田はこの弟と京都市街を散歩し、夕食をともにするなど、同窓の縁を深めている。[77] 池田は十二月に足柄支店長に転じたが、義塾との縁も続いており、一八九八年一月二十四日条には、「夕方三縁亭に於て福沢先生の饗応を受く慶應義塾出身にして三井部内の重立ちたる者三拾名計を招きたるなり」と記した。[78]

かくして、ハーバード大学人脈を再確認した池田に、その語学力や人格が生かされる機会が訪れる。一八九八年九月、池田は欧米視察に発ち、ニューヨークやロンドンなどで銀行制度を視察することとなったのである。

父宛書簡によると、池田は十月八日にニューヨークに到着、[79] 十八日に路傍で新聞を購入していると、「傍らより声を掛る者あり驚て見ればハーヴァード大学同級のケーヴンなるものなり互に其奇遇に驚てケーヴン今は当市の郵便局に奉職し居ると云ふ」という、同窓生との偶然の出会いがあった。[80] 以後、池田はハーバード時代の同窓生との交際を重ねていく。翌月六日には、ニューヨークで弁護士見習をしていた「ハーヴァード大学之同窓コーリスなるものに遇」い、夕食をともにしたあと、一緒に「ハーヴァード倶楽部」を訪れた。「此倶楽部は当市在住の卒業生より成り書籍室、食堂、玉突場等の設備足らざる処なし」で、池田も入会を勧められたが、「入会金会費等」が高すぎるため辞退している。[81] 同月九日にも、「ハーヴァード大学の同窓にして殊に懇親なりしもの今は当市の某銀行にありて株券係を為し居る」「カルビン」という人物と一緒に夕食をとった。[82] 十三日には、再度

「コーリス」と会って昼食の「饗を受」けている。[83] 十二月五日には、公使としてニューヨークに到着した小村寿太郎と会っているが、「小村氏かハーヴァードに書生たりしは二十年の昔にあり米国変化の大なるに驚け居れり」と池田は記した。[84]

父宛書簡の十二月二十日条によると、池田はハーバード大学を卒業する際、五年間、母校に寄附する約束をしていたが、一回支払っただけだったため「常に心に懸り居りたり依て今回の渡航を機として本日金二拾弗を送付し払込を完結」している。[85] 池田にとってハーバードの存在は大きく、同月三十日には「夕方ハーヴァード大学旧友之カルピロン」の来訪を受けたほか、[86] 一八九九年一月八日に「名誉領事」の晩餐会に招かれると、その子息がハーバード出身で「何ぞ図らん同級生ならんとは」と驚いた。[87] 翌日には「助教授ベーツ氏来訪」して夕食をとったが、「ベーツ氏はハーヴァート（ママ）にて相識る者」であった。[88] 十一日に小村に招かれて公使館で日本食をふるまわれたが、小村とは「ハーヴァード大学同窓会等東京にて一二回面会したることあり」と池田は記している。[89]

一八九九年一月十三日にボストンに到着した池田は、ケンブリッジの「旧知」やハーバード大学を訪ね、「ハーヴァード大学は依然として変る所なし又学校付近のシヤツ屋煙草屋等面識の者は握手して再渡を賀せる者少からむ」と旧交をあたためた。[90] 翌日にはボストンの銀行を歴訪しつつ、ケンブリッジの「旧識を尋ぬる等昨日の如し」で、[91] 十五日には、同行した三井銀行のメンバーを連れて学内を案内し、「旧友ハザードの寄宿舎に赴き夜学校食堂に於て夜餉の饗に預る食堂は勿論食事の献立に至るまで旧態依然懐旧の情に堪へざるものあり」と感慨を述べている。[92]

池田にとってハーバード大学時代の思い出がいかに深いものであったか、また、そこで形成された人脈が日米での活動において大きな意味をもっていたことがうかがえよう。

後年の回顧によると、ロンドンに移った池田は、「ナショナル・プロヴィンシャル・バンク」でマネージャー

から「金が多い時には余計貸し、無くなったら貸さない。決して外へ行つて借りたりはしない」といった「有益な話」を聞くなど、収穫が多かったという。[93] 帰国後に作成した報告書では、「日本ニ在テ外国銀行ノ事ヲ記スルノ書ヲ繙クニ当リ其ノ必ス先ツ信用ヲ説カサルハナク總テ信用ヲ以テ其取引ノ地盤トナス」と、信用の重要性を説いている。[94] 信頼関係を欠いた金銭の貸借がいかに深刻な問題をもたらすか、池田は父とともに、留学費用問題を通して身をもって体験していた。

その後、池田は本店営業部次長、営業部長、常務取締役、三井合名会社常務理事、日銀総裁、蔵相と出世の階段を上っていくことになるが、本稿ではこうしたキャリア形成とアメリカ留学との具体的関係性までは論じきることができない。[95] ただ、池田が広く親英米派として知られ、晩年の処世訓でも、金銭の貸借や社会的信用、公共に貢献する寄附文化の実践、アメリカ留学の重要性などを説いていたことを、簡単に指摘しておくにとどめたい。

池田が死去した約半年後の一九五一年三月に刊行された『私の人生観』において池田は、金銭の賃借について「バランスシートだけかと云へば、やはり人間同士の取引であるから、人に対する信用といふものを見落とす訳にはいかない。……貴方はまづ嘘をついていけない、銀行を騙すやうなことを云つてはならない。[96]」と強調している。公共への貢献、寄附文化についても、「公に奉ずるといふ精神に於てアメリカ人は日本人に理解出来ないものを持つて居る。私は、それがアメリカ魂ではないかと考へて居る。[97]」「公共の為に尽すといふこと、社会の為に寄附するといふことに於ては、イギリス人、アメリカ人の方が遙かに責任感や義侠心に富んで居ると思ふ。[98]」「金持が有り余つた金を出すのはなんでもない。貧者の一灯ではないが、そんな暮しをして居る人間でも公共のことを考へ、実行するといふアメリカ人の気性――これが個人主義なら、私どもはこの個人主義をこそ学ばなければなるまい。ところが日本人となると、公共の為に寄附するよりも女中の一人も置いてからといふ考へが先になる。……とにかく自分のことは自分でやつて人に厄介をかけない。仮令子供でも兄弟でも厄介にならない、そして社

会公共の為に出来るだけのことをする――これが英米人の精神で、決して日本で言はれる様な個人主義ではないと思ふ」[99]などと繰り返し語った。[100]

海外留学に関しても、戦前の日本人はヨーロッパ志向が強く、「一般の人気はアメリカといふものを学問の上からも軽侮する様になつた。ヨーロッパへ行く日本人は、大抵行きがけの駄賃にアメリカ見物をして行くけれども、アメリカなど何も学ぶところはないといふ空気であるからスーと素通りする」として、「真のアメリカを理解したといふ人は非常にパーセントが低かつた。このアメリカを見物したといふことは結果として却つていけなかつたのではないか。……現在の留学や見物の大流行もさうならなければいゝと思ひますね」と語っている。[101]

これらの池田の発言は敗戦後の占領期に語られたものであるため、割り引いて受け取る必要があろう。[102]また、池田が留学した当時、アメリカは「東部が中心……東部と云つてもニューイングランド」が中心で、「その頃は商工業も東部が中心であつたから、金持も東部に居る」という状況であり、[103]その意味で池田の経験も限られたものに過ぎず、アメリカの「品格ある家庭の雰囲気」を強調するあまり、「イギリスでも、アメリカでも、妾をもつたり、不正をしたり、いろ〳〵のスキャンダルをもつ人々も居るけれども、さういふ人はこの場合問題外である」と英米社会の問題点から目を背けるような態度も、軽視すべきではない。[104]こうした限定的で視野の狭いアメリカ経験であるとはいえ、「私がアメリカから受けた影響といふものは、アメリカの実際の家庭生活、学生生活を通して数限りなくあると思ふ」[105]というのは本音だろう。このアメリカ留学の基盤の上に、実務経験や敗戦体験などが加わり、池田のアメリカ観やアメリカ人脈が形成され、生涯にわたってその生活・行動様式や価値観を規定していったのである。

（1）慶應義塾派遣留学生制度の実態については、辻直人「慶應義塾海外留学生の派遣実態とその意義」（『近代日本研究』第三〇巻、二〇一四年二月）、参照。
（2）慶應義塾編『慶應義塾百年史』中巻（前）（慶應義塾、一九六〇年）、三一四―三一五頁。
（3）前掲『慶應義塾百年史』中巻（前）、三一四―三一五頁。
（4）池田成彬述／柳沢健編『財界回顧』（世界の日本社、一九四九年）、三二―三三頁。
（5）村田昇司編著『門野幾之進先生事蹟・文集』（門野幾之進先生懐旧録及論集刊行会、一九三九年）、二七八―二七九頁。
（6）前掲『慶應義塾百年史』中巻（前）、三一四―三一六頁。
（7）松浦正孝『財界の政治経済史―井上準之助・郷誠之助・池田成彬の時代』（東京大学出版会、二〇〇二年）、松浦正孝『日中戦争期における経済と政治―近衛文麿と池田成彬』（東京大学出版会、一九九五年）、堀峰生「池田成彬の経営観と三井「改革」」（『企業家研究』第一三号、二〇一六年七月）、穴山宏司「昭和初期における財界の形成―「財界」における池田成彬と結城豊太郎」（『東京大学日本史学研究室紀要』第一七号、二〇一三年三月）、藤田安一「池田成彬論」（『政治経済史学』第三一七号、一九九二年一一月）など、参照。
（8）丸山眞男・武谷三男・南博・鶴見俊輔「池田成彬氏に聞く」（『思想の科学』第四巻一号、一九四九年一月）、五〇頁。
（9）前掲『日中戦争期における経済と政治―近衛文麿と池田成彬』、二六二頁。
（10）慶應義塾入学前、池田は進文学舎で坪内逍遙や高田早苗などから英語を教わり、共立学校で高橋是清からも「スウィントンの万国史」を教えてもらっている（池田成彬「一実業家の教養」『新潮』第四七巻六号、一九五〇年六月、四六頁）。
（11）前掲『財界回顧』、二七―三二頁。
（12）前掲「池田成彬氏に聞く」、三九頁。別の回顧でも、留学費用について父・成章にせがんだところ、「今で云ふ家計簿」を見せられ、「月給から貯めた心細い数字を示される。到底問題にならない」状態だったと述べている（前掲「一実業家の教養」、四七頁）。成章は一八八九年に米沢市会議員に当選。池田が留学出発直前の一八九〇年七月一五

日に議長となり、その帰国後に両羽銀行頭取、山形県会議長などを歴任する。

(13) 前掲『財界回顧』、三二—三五頁。

(14) 前掲『財界回顧』、三五—三六頁。

(15) 池田成彬『私の人生観』(文藝春秋新社、一九五一年)、二六九—二七一頁。

(16) 前掲『私の人生観』、二〇七—二一一頁。

(17) 池田は慶應義塾でも「まあ尊王攘夷論ですね。頼山陽を非常に尊敬しておつた」ため、福沢が演説で「お前たちは巧言令色をしなければならん」と話したのに反発し、二度と演説館に行かなかったという(池田成彬述/柳沢健編『故人今人』世界の日本社、一九四九年、四—五頁)。攘夷論に傾倒したのは、大隈重信外相が来島恒喜に襲撃された事件(一八八九年)などの影響による、とも述べている(前掲「一実業家の教養」、四八頁)。

(18) 前掲『私の人生観』、二〇二頁。

(19) 前掲『私の人生観』、一六八—一七三頁。

(20) 前掲『私の人生観』、一八五—一八八頁。

(21) 前掲『私の人生観』、一八〇—一八一頁。池田はみずからの宗教観について、「無宗教だと答へる他ないが、私の考へはどちらかと云ふと儒教が主になつてゐますね。……併し宗教はと訊かれると、無宗教と云ふより他ありませんね」と述べている(政治経済研究会編『日銀新総裁池田成彬縦横談—青年君!修養の書』東京パンフレット社、一九三七年、三〇—三一頁)。

(22) 前掲『私の人生観』、一九二—一九三頁。

(23) 池田成章・成彬の文書は池田家から山形県立図書館に寄託され、東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター原資料部が複製・整理した。本稿では同センターが整理した複製版(マイクロフィルム)を利用している。

(24) 東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター(原資料部)所蔵マイクロフィルム「池田成章・成彬関係文書」、I-1-1「送米日記」上、一八九〇年八月二七日の条。

(25) 前掲、I-1-1「送米日記」上、一八九〇年九月一日の条。

(26) 前掲、I－1－1「送米日記」上、一八九〇年九月一六日の条。
(27) 前掲、I－1－1「送米日記」上、一八九〇年九月二六日の条。成章は日記で、ドロッパーズについて「ドロッハース」「ドロッパース」などと記し、ハーバードを「ハーバート」と表記しているが、引用箇所はすべて原文のママである。
(28) 前掲、I－1－1「送米日記」上、一八九〇年一二月二八日の条。
(29) 前掲、I－1－1「送米日記」上、一八九一年一月一〇日の条。
(30) 前掲、I－1－1「送米日記」上、一八九一年二月六日の条。
(31) 前掲、I－1－1「送米日記」上、一八九一年三月二九日の条。
(32) 前掲、I－1－1「送米日記」上、一八九一年四月一一日の条。
(33) 前掲、I－1－1「送米日記」上、一八九一年五月一四日の条。留学費用の顚末について成章が残した手記には、ハーバード大学側からの学費支給を池田が辞退し、アメリカでの物価も騰貴したことで、「留学中の送金は遂に予期の三倍を超へ、余家留学前の資産はこれがためにほとんど蕩尽し、ほかに慶應義塾より二千余円の負債を受け、すこぶる困難の境遇に立到りし」などと記されている（池田成彬伝刊行会編『池田成彬伝』慶應通信、一九六二年、六〇―六二頁）。本文の通り、負債返済の義務は池田が負ったようだが、資産を売却した上に義塾から多額の貸費を受け、息子にその返済を背負わせて自らも保証人になるのは、成章にとって大きな問題であった。
(34) 前掲、I－1－1「送米日記」上、一八九一年五月一六日の条。
(35) 前掲、I－1－1「送米日記」上、一八九一年六月八日の条。
(36) ジェームズは哲学者・心理学者で、ハーバード大学教授。小泉信三は、池田はハーバードでジェームズの教えを受け、後年もジェームズの風貌について語り、両者には交流もあったとして、「抽象的思弁を排して実践実用を重んずる」ジェームズの哲学が「池田平生の思想と異質のものではない」と評している（小泉信三「池田成彬」小泉信三『小泉信三全集』第一九巻、文藝春秋、一九六八年、三五六―三五七頁）。ジェームズは留学費用問題についても、池田にアドバイスしている（前掲『財界回顧』、三四頁）。
(37) 前掲、I－1－1「送米日記」上、一八九一年一〇月一三日の条。

(38) 前掲、I－1－1「送米日記」上、一八九一年一〇月一三日の条。
(39) 前掲、I－1－1「送米日記」上、一八九二年三月二日の条。
(40) 前掲、I－1－1「送米日記」上、一八九二年八月五日の条。
(41) 小幡塾長に対する池田の借用書が現在一二通残されており、最初のものは一八九二年一月七日付で、池田は小幡に「百三十一円五拾八銭（米貨百弗）」を「帰朝之日より四ヶ年間に分賦」して「返却可仕為後日証書」を記している。その後、同年四月七日に一三八円八九銭（米貨一〇〇ドル）、同年七月一七日に一四〇円八五銭（米貨一〇〇ドル）、一八九三年一月二日に一四九円八一銭（米貨一〇〇ドル）、同年五月一日に一五二円九銭（米貨一〇〇ドル）、同年七月二四日に一五二円六七銭（米貨一〇〇ドル）、一八九四年一月八日に一七七円七八銭（米貨一〇〇ドル）、同年四月三〇日に一一一円六四銭（米貨一〇〇ドル）、同年七月一一日に一九七円四銭（米貨一〇〇ドル）、一八九五年一月八日に二〇七円二五銭（米貨一〇〇ドル）、同年四月二日に二一一円六四銭（米貨一〇〇ドル）、同年六月一六日に一八九円五九銭（米貨一〇〇ドル）、をそれぞれ学業資金として借り、帰国後四年ないし八年間に返済することを、池田は小幡に約束していた（「池田成彬ニ関スル書類」慶應義塾福沢研究センター所蔵、寄13084-19）。一年間三〇〇ドルを四年間貸与するという慶應義塾評議員会の決定が、忠実に守られたのがわかる。
(42) 前掲、I－1－1「送米日記」上、一八九二年一二月一〇日の条。
(43) 前掲、「池田成章・成彬関係文書」、I－1－2「送米日記」下、一八九三年一月二五日の条。
(44) 前掲、I－1－2「送米日記」下、一八九三年三月五日の条。
(45) 前掲、I－1－2「送米日記」下、一八九三年四月三日の条。
(46) 前掲、I－1－2「送米日記」下、一八九三年六月一日の条。
(47) 前掲、I－1－2「送米日記」下、一八九三年六月一五日の条。
(48) 前掲、I－1－2「送米日記」下、一八九四年二月一九日の条。
(49) 前掲、I－1－2「送米日記」下、一八九五年六月二日の条。
(50) 前掲、I－1－2「送米日記」下、一八九五年七月二八日の条。
(51) UAVIII 15.78.10 1890–1896 Box 2393 ikeda. Harvard University Archives.

(52) Ibid.
(53) Ibid.
(54) *The Harvard University Catalogue 1890–91* (Cambridge: The University, 1890), p.134. 正確には「646 Cambridge St.」であろう。
(55) *The Harvard University Catalogue 1891–92* (Cambridge: The University, 1891), p.141.
(56) *The Harvard University Catalogue 1892–93* (Cambridge: Harvard University, 1892), p.156.
(57) *The Harvard University Catalogue 1893–94* (Cambridge: Harvard University, 1893), p.157.
(58) *The Harvard University Catalogue 1894–95* (Cambridge: The University, 1894), p.155.
(59) Harvard University, *Quinquennial Catalogue of the Officers and Graduates 1636–1930* (Cambridge: The University, 1930), p.372.
(60) UAVIII 15.75.10 Box 1 1895 ikeda. Harvard University Archives. 注(51)の史料とあわせ、史料の提供、および掲載の許可をいただいたハーバード大学アーカイブスに、御礼申し上げたい。
(61) Ibid. 池田の次男で英文学者の潔は、「アメリカの大学は選択制度なので、自然科学系統の科目は敬遠してしまったらしい」と証言している（池田潔「父を語る」、小泉信三・池田潔『現代随想全集』第六巻、創元社、一九五三年、四〇五頁）。事実、池田の履修科目に自然科学科目系はない。
(62) Harvard University, *Announcement of Courses of Instruction provided by the Faculty of Art and Sciences for the Academic Year 1890–91* (The University, 1890), pp.12–35.
(63) Harvard University, *Announcement of Courses of Instruction provided by the Faculty of Art and Sciences for the Academic Year 1891–92* (The University, 1891), p.25.
(64) Harvard University, *Announcement of Courses of Instruction provided by the Faculty of Art and Sciences for the Academic Year 1892–93* (The University, 1892), p.32.
(65) Harvard University, *Announcement of Courses of Instruction provided by the Faculty of Art and Sciences for the Academic Year 1893–94* (Cambridge: Harvard University, 1893), p.30.

(66) Harvard University, *Announcement of Courses of Instruction provided by the Faculty of Art and Sciences for the Academic Year 1894-95* (Cambridge: The University, 1894), p.31.
(67) 慶應義塾編『慶應義塾百年史』上巻（慶應義塾、一九五八年）、四四〇—四四一頁。
(68) 前掲『私の人生観』、一二八頁。
(69) 前掲『財界回顧』、四一—四三頁。
(70) 池田は父との関係について、「親父は、平生はそんなに喧しいことは云ひませんでしたけれども、何か間違つて尻尾をつかまれると、ひどく叱られたものです」として、「十五、六歳の頃」、父の友人である小森沢長政から日記を書くよう薦められて池田は受諾したものの、実際には書いていなかったため、約束を忠実に守るよう父に怒られ、晩年までこれを意識していたと回想している（前掲「一実業家の教養」、四七頁）。池田が日記風の父宛書簡を残し、後年にも日記を書いたのは、このためであろう。
(71) 前掲「池田成章・成彬関係文書」、Ⅲ－3－1－1「池田成彬書簡（日記）」（書簡綴）、一八九七年六月一五日の条。
(72) 前掲、Ⅲ－3－1－1「池田成彬書簡（日記）」（書簡綴）、一八九七年九月二日の条。
(73) 前掲、Ⅲ－3－1－1「池田成彬書簡（日記）」（書簡綴）、一八九七年九月二八日の条。ドロッパーズの妻であったコーラ・A・ドロッパーズは一八九六年八月一七日に死去、およそ一年後にドロッパーズはコーラの妹であるジーン・T・ランドと結婚した。ドロッパーズは再婚のために一時帰国していたものと思われ、池田のいう「ランド」はジーンの家族のことと思われる。ドロッパーズが再度来日し、アメリカに帰ったのは一八九八年末のことである（西川俊作「G・ドロッパーズの履歴と業績」『三田商学研究』第二六巻一号、一九八三年四月、一一一—一一二頁）。
(74) 前掲、Ⅲ－3－1－1「池田成彬書簡（日記）」（書簡綴）、一八九七年一〇月二二日の条。
(75) 前掲、Ⅲ－3－1－1「池田成彬書簡（日記）」（書簡綴）、一八九七年一二月一〇日の条。
(76) 前掲、Ⅲ－3－1－1「池田成彬書簡（日記）」（書簡綴）、一八九七年一二月一一日の条。
(77) 前掲、Ⅲ－3－1－1「池田成彬書簡（日記）」（書簡綴）、一八九七年一二月一二日の条。

(78) 前掲、Ⅲ－3－1－1「池田成彬書簡（日記）」（書簡綴）、一八九八年一月二四日の条。三縁亭は東京・芝山内の西洋料理店で、慶應義塾の行事などが催された。なお、池田は一九〇二年に慶應義塾評議員となり、一九四一年には評議員会議長に就任した（前掲『慶應義塾百年史』中巻（前）、五三三―五三四頁、慶應義塾編『慶應義塾百年史』中巻（後）、慶應義塾、一九六四年、六三六頁）。

(79) 前掲「池田成章・成彬関係文書」、Ⅲ－3－1－2「池田成彬書簡（日記）」（書簡綴）、一八九八年一〇月八日の条。

(80) 前掲、Ⅲ－3－1－2「池田成彬書簡（日記）」（書簡綴）、一八九八年一〇月一八日の条。

(81) 前掲、Ⅲ－3－1－2「池田成彬書簡（日記）」（書簡綴）、一八九八年一一月六日の条。

(82) 前掲、Ⅲ－3－1－2「池田成彬書簡（日記）」（書簡綴）、一八九八年一一月九日の条。

(83) 前掲、Ⅲ－3－1－2「池田成彬書簡（日記）」（書簡綴）、一八九八年一一月一三日の条。

(84) 前掲、Ⅲ－3－1－2「池田成彬書簡（日記）」（書簡綴）、一八九八年一二月五日の条。

(85) 前掲、Ⅲ－3－1－2「池田成彬書簡（日記）」（書簡綴）、一八九八年一二月二〇日の条。

(86) 前掲、Ⅲ－3－1－2「池田成彬書簡（日記）」（書簡綴）、一八九八年一二月三〇日の条。

(87) 前掲、Ⅲ－3－1－2「池田成彬書簡（日記）」（書簡綴）、一八九九年一月八日の条。

(88) 前掲、Ⅲ－3－1－2「池田成彬書簡（日記）」（書簡綴）、一八九九年一月九日の条。

(89) 前掲、Ⅲ－3－1－2「池田成彬書簡（日記）」（書簡綴）、一八九九年一月一一日の条。

(90) 前掲、Ⅲ－3－1－2「池田成彬書簡（日記）」（書簡綴）、一八九九年一月一三日の条。

(91) 前掲、Ⅲ－3－1－2「池田成彬書簡（日記）」（書簡綴）、一八九九年一月一四日の条。

(92) 前掲、Ⅲ－3－1－2「池田成彬書簡（日記）」（書簡綴）、一九九九年一月一五日の条。

(93) 前掲『財界回顧』、五〇―五三頁。

(94) 鈴木鶴吉編『三井銀行欧米出張員報告書』（鈴木鶴吉、一九〇一年）、六七九頁。

(95) 池田は留学から帰国後、毎年慶應義塾からの負債を返済していたようで、一八九九年三月二八日に「明治三十一年度分年賦返却金」として「弐百五拾円」を受領した領収書が慶應義塾から池田に発行されており、一九〇六年六月

二六日をもって、池田は義塾からの借金を「皆済」している（前掲「池田成彬ニ関スル書類」）。当初の返済期限を過ぎているが、帰国後八年を迎える一九〇三年の三月八日、池田は慶應義塾長の鎌田栄吉に書簡を送り、「先般来乃御配慮」に礼を述べ、「証書別紙之通り」とした上で、近日中に挨拶に出向きたいと述べている（慶應義塾福沢研究センター所蔵、寄13084-19）。この頃に、返済期限の延長を認めてもらったのであろう。完済時点の池田は、三井銀行本店営業部長であった。

(96) 前掲『私の人生観』、一四六―一四七頁。

(97) 前掲『私の人生観』、二一一頁。

(98) 前掲『私の人生観』、一〇二頁。

(99) 前掲『私の人生観』、一〇六―一〇七頁。ここでいう「そんな暮しをして居る人間」とは、「ハーバード大学の学校友達」であった建築家の「フレデリック・オルムステッド」のことで、八〇歳頃のときに池田に手紙を送り、「自分はもう年齢もとつたから隠退しようと思つて、その準備をしてゐる。……私の収入の二割か三割を公共の為に使つて世の中の為になる様にしたいと考へて居る」と伝えてきたという（前掲『私の人生観』、一〇三頁）。この人物に限らず、同窓生とのつながりは晩年まで続いており、池田潔は、「ハーヴァード大学の父の同級会からは会誌を送つて旧友達の動静を知らせてきたり、年次晩餐会の席上で読み上げるメッセージを送れなどと、始終、好意のある連絡がある」と池田が没した翌年に記している（池田潔「父の泪」、前掲『私の人生観』、二九九頁）。

(100) 日露戦争後にハーバード大学が日本文明講座を設置しようとした際、日本ハーバードクラブで寄附金を出すことなり、池田が主として集金にあたったが、「金持で知られる某氏」は一文も出さず、三井と三菱で出したのが二〇〇〇円ずつだった。これに対し、経済的に困窮していた小村寿太郎は五〇〇〇円を出したため、池田は小村について「銭離れがいゝ」と賞讃している（前掲『私の人生観』、二七九頁）。日本文明講座の設置経緯については、拙著『明治日本はアメリカから何を学んだのか―米国留学生と「坂の上の雲」の時代』（文春新書、二〇二一年）、一六二―一六四頁、参照。

(101) 前掲『私の人生観』、一六四―一六五頁。

(102) 池田は一九四五年一二月にA級戦犯容疑者に指定されて翌年五月に解除、戦後は大磯で隠棲生活を送った。

(103) 前掲『私の人生観』、一六六―一六七頁。

(104) 前掲『私の人生観』、一八二頁。もっとも、池田が子どもたちをイギリスに留学させたことなどを踏まえて、丸山眞男が「気分的にアメリカよりもイギリスが好きだというその点はどこですか」と池田に尋ねた際には、「アメリカはよいところもありますし、早く物が判つて気軽な卒直なところがありますが不作法と云う感じを与えますね。その点はイギリスの方が人間が落ち付いて頼りになるような気がします」と答えている（前掲「池田成彬氏に聞く」、三九―四〇頁）。池田がイギリスに憧れを抱いた要因は、その留学先がニューイングランドであった点と、最初のイギリス訪問時に受けた好印象にある。池田自身、アメリカ、特にニューイングランドから強い影響を受けたと語っており、鶴見俊輔から「日常生活の間においてニューイングランドの人達の作法を身につけて来られたわけですね」と問われて、「そうです」と応じている（同前、五〇―五一頁）。別の回顧では、「どうしてもイギリスの方がいいやうな気がして仕方がない」理由について、最初にイギリスを訪れたのが「ヴィクトリーア朝華やかなりし時のことだつたものですから、えらいところだけしか見てゐない、そんなことも印象に残ってゐたからでもあつた」とした上で、イギリス人は付き合うと「仲々味があるのです。まあ、国民として、イギリス人のやうな国民になりたいと感じて帰つて来た」と語っている（前掲「一 実業家の教養」、五一頁）。

(105) 前掲『私の人生観』、二〇二―二〇三頁。

〔追記〕 ハーバード大学アーカイブスおよび東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター原資料部所蔵史料の収集・判読にあたっては、姜兌玧氏（慶應義塾福沢研究センター調査員）のご協力を得た。ここに厚く御礼申し上げたい。なお、本稿は福沢諭吉記念慶應義塾学事振興基金および大学特別研究期間適用による特別研究費の研究成果である。